

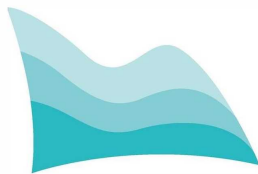


## 世界レベルの医療ヘルスケア

一般社団法人サイバースマートシティ創造協議会 (MCSCC)は、益田市医師会、岡山大学医学部、島根大学医学部、オムロンヘルスケア株式会社などと連携して、益田市における医療ヘルスケア分野でのスマート技術の実証を支援しています。

MCSCC顧問であり、MCSCCと本年7月に包括連携協定を結んだ公益社団法人益田市医師会の会長・松本祐二先生が寄稿に記しておられるので詳細は譲りますが、全国から注目を集めている取組です。

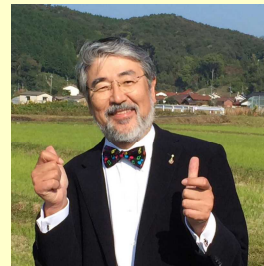
益田市でのプロジェクトのうち、医療ヘルスケア分野については、生体データという究極の個人情報をもより厳重に管理できるよう、MCSCCとは別に、同時期の2018年10月に設立された一般社団法人益田ヘルスケア推進協会が実施に当たっています。



一般社団法人  
益田ヘルスケア推進協会  
Masuda Healthcare Association

## スマート道路モニタリングが受賞

MCSCC会員企業・KYB株式会社が「スマート道路モニタリングシステム」で「MCPC award」を受賞しました。同社がMCSCCと島根県益田市において実証実験を続けてきたものです。この賞はモバイルコンピューティング推進コンソーシアム(MCPC)が2003年より行っているもので、KYBは「サービス&ソリューション部門」の「AI&ロボット委員会特別賞」を受賞。画像は11月25日東京プリンスホテルで開催された受賞式の様子です。



公益社団法人  
益田市医師会 会長  
MCSCC 顧問

## 松本祐二

脳卒中、心筋梗塞、心不全の最大の危険因子は高血圧です。世界では約11億3000万人、日本では約4,300万人の治療対象者がいます。最新の2019年の高血圧治療ガイドラインを見ると日本では治療対象者のうちの27%しか適切な医療介入ができていません（未治療の患者が44%、治療中で不十分な治療患者が29%）。そのような状況の中でも、現在、西欧や環太平洋の高所得国では血圧は下がり始めています。一方、低・中所得国では高血圧は現在も増加中です（治療介入も血圧測定も不十分な状況が続いています）。

血圧は適切に介入することで良いコントロールが得られることが知られています。2018年9月からMCSCCの音頭でオムロンヘルスケアと益田市とで始まったスマートヘルスケア事業は3年目を迎えコロナ禍でも順調に血圧データを集めながらの研究が進んでいます。通信機能を持つ血圧計で家庭血圧を測定し岡山大学医学部公衆衛生学教室のサーバーにデータを集積・解析してその結果を参加者にフィードバックしています。加齢とともに患者数の増加が認められる高血圧はその初期から介入することで、多くの循環器疾患の予防につながりますが、初期には全く自覚症状がないので受診のための動機づけが極めて難しい疾患のひとつです。

血圧は診察血圧と家庭血圧では家庭血圧の方が信頼性の高いデータというのが医学界では常識になっています。益田市のIoTを活用したスマートヘルスケアでは血圧正常の方や境界型の方が受診の必要がなく注意喚起が必要な時点で行われますので、きわめて医療資源も有効に使える方法なのです。そして薬を使わずとも血圧測定を繰り返しているだけでも健康に注意するような行動変容が起こることが証明されています。健康寿命の延伸の第一歩はIoTを活用した家庭血圧測定にあるといっても過言ではないでしょう。益田市のようなシステムが日本中や世界中に広がることを期待しています。